

龍源寺間歩

石見銀山では、さまざまな規模の坑道が 900 本以上発見されていますが、龍源寺間歩はその中でもおそらく最も代表的なものでしょう。銀の産出量という点で、石見銀山の中でも上位 5 本の坑道に数えられる龍源寺間歩の長さは 600 メートルで、最初の 273 メートルは現在でも一年を通じて観光客向けに開放されています。この坑道は 1715 年に掘られ、江戸（現在の東京）にある幕府から任命された現地の代官の管理下に置かれました。このため、龍源寺間歩で採掘された銀は、1603 年から 1867 年まで日本を統治した徳川幕府にとって直接の収入源でした。

銀山の内部には、メインの坑道から枝分かれする複数の小さな坑道があります。これらは山の銀脈を辿るように掘られたもので、その名残は壁のあちこちで今でも見ることができます。また、水平に伸びる坑道はメインの通路よりもずっと狭いことに気づくでしょう。これは、荷車の出入りを可能にするために、19 世紀後半にメインの通路が拡張されたためです。実際にその幅は、近代的な掘削機器の導入以前では典型的なものとなっています。これらの坑道は、ノミと金づちのみを使って掘られたもので、たいへん時間のかかる作業であったため、坑夫がなんとか通り抜けられるだけの幅で作られました。

銀山を観光客向けに開放するために 1989 年に掘られた、出口へと続くトンネルを通して戻ってくる際には、新たに着任した幕府の役人に銀山の機能を説明する目的で使われた江戸時代（1603 年～1867 年）の絵画の複製が描かれたボードをお見逃しなく。